





ラヴィニアの手記

～旧オーク砦にて発掘された遺稿～

ラヴィニア・メイザースは東陰暦1303年～1524年に活躍した魔導学者であり、その功績から“賢者”の称号を得た歴代24人のうちの一人である。

当時既に大きく数を減らしていた月妖族の出自であり、潤沢な魔力さえあればいつまでも若いまま生き続けられたと言われ、事実彼女は200年以上もの間孤高の学者として活動していた記録が残されている。

「月齢と白銀魚の繁殖期の関連性」「魔導蓄積炉の開発」「魔火山の活動周期の解明」など多様な分野で研究成果を残しているが、とりわけ本人は様々な種族の生態研究や民俗学などの研究を好んでおり、自身の属する月妖族の失われた歴史や、亜人種の社会性解明など現在常識とされる事柄も彼女なしには発展してこなかったとされる。

その研究内容から軍事面においても重宝されていたとされ、国からの支援のもと多くの敵対種族の内情を暴いてきたとも言われる。

本人は生活から研究まで独力で行うことを好み、
当人の人間性を語る資料は少ない。
しかし飄々とした態度とは裏腹に、
存外人懐っこい性格をしていたことが伺える。

東陰暦1500年ごろより、オークの生態調査を
フィールドワークとして開始。当時辺境において
オークによる略奪行為が頻発しており、
彼らの行動を研究することでその襲撃を
予測することが主な目的だったと思われる。

しかし東陰暦1524年、オークの襲撃が
特に多いモルドラ山地周辺の村に向かったのを最後に
足どりが途絶える。

以後の資料に彼女の存在を記すものはなく
長らくこの年を彼女の没年とすることが一般的であった。

しかし東陰暦1927年にモルドラ山奥地にあった大規模なオーク砦遺跡が発見され、発掘調査が始まる。8年後、砂中に埋もれていた地下牢獄にて大量の手記が見つかり、その筆跡と内容からこれがラヴィニアが遺したものと断定される。

手記は空気に触れない環境であったため非常に状態がよく、オーク砦での彼女の生活と彼女から見たオークたちの様子が詳細に描かれている。

これによりラヴィニア自身と当時のオークたちの風俗研究が大きく進むことが予見されるが手記は1000冊をゆうに越えており、全貌解明には何年もかかると思われる。

オークの社会学

ラヴィニア・メイザース：著 賢人調査学会：編集

まえがき

オークは北ノギン連峰を越えた先に支配圏を持つ亜人種。古くは人間・月妖族や地床族などと起源を同一にすると見られているが、いつごろ分化したかは明確となっていない。

険しいノギン連峰で領地を隔てているため、人族のいかなる国家とも積極的な交流は持っていないが、彼らの本国からはぐれた者たちが連峰の人領土側に点在して生活しているため、全くの未知的存在ではない。しかし、ほとんどの場合で歓迎される存在でもないことは事実である。

彼らの生態、社会性については詳しくわかっていない点が非常に多い。しかし彼らの種族的特徴として人種、亜人種の雌を略奪する“女狩り”という行為が横行している点があげられるだろう。

彼らの種族は遺伝的欠陥としてある種の染色体異常、同種同士の交配では受精時にY染色体を持つ精子が優勢的に選ばれてしまう、すなわち異常な雄性体出生率を示す。この欠陥は生物種としては致命的であり、本来なら自然下において淘汰されるはずである。しかし彼らオークは遺伝的に近い別の種、つまり人種や亜人種の雌をさらい、彼女たちに子を産ませるといった奇怪な習性でこの欠点を克服している。

興味深いことに、この際生まれてくる子供は両親の特徴を受け継ぐのではなくオーク側の遺伝子情報が母親側の遺伝子情報より優先して発現する——という特徴を持つ。

これらの情報は解剖実験などにより広く知れ渡っているが、彼らの女狩りの手口、狩った女性をどこに運び、どのように扱うのか、育児や教育などの形態などはほとんど判明していない。

そういった彼らの社会性を知ることは、長期的な視点で昨今頻発しているオークの女狩りに対する防衛策を構築する上で非常に重要なものとなるだろう。

著者は北ノギン連峰に実際に赴き、彼らの集落や拠点を偵察し情報を収集している最中である。まだ調査をはじめて一ヶ月ほどではあるものの既にさまざまな驚くべき発見がいくつもあり、手持ちのノートにまとめ切れなくなったため一度麓の村に降りてきてこれを書いている。

話によるとここ(編集者注：モルドラ山の南西にあったネギン湖周辺の村のことか)から北東にあるモルドラ山が特にオークの襲撃が多い模様であり、すでにいくつかの村が放棄されたと聞く。不確定な情報ながら、これまでのような山賊的形態のオーク集落ではなく本格的な砦のようなものが建造されているという話も入ってきた。これが事実だとするとことはオークと人族の戦争というところまで発展しかねず、彼らに先じてできる限りの情報を手に入れることが肝要となるだろう。

もちろん、この先の偵察は重大な危険がついてまわる。
現在“陰者の外套”“飛竜の旋風”などの
貴重な装備を手配しており、それらが届き次第
慎重に探索を行う計画である。

ラヴィニアの手記

一日目：

手配していた装備が到着する。

“陰者の外套”は姿のみならず音や気配を下界から遮断するという強力な魔道具であり、

“飛竜の旋風”は緊急時に開くことで一定距離を飛翔することができるというこれも強力な魔道具だ。

どちらも一般には出回っていない私謹製のもので、本来このようなフィールドワークに持ち込むことはないのだが地勢上孤立無援となることが予想されるため警戒して携帯する。

オークは肉体的には脅威的な能力を誇るが、現在のところ魔法やその類に対する知見はさして深くないと推測される。万が一発見されたとしても手持ちの装備や私の魔法で充分対処できるとは思われるが、失敗した時の結末を考えれば用心するに越したことはない。

珍しく人を雇うことも考えたには考えたが、かえって私一人の方が動きやすいだろう。いつものことだ。

二日目：

モドラ山の麓にある村についた。

名前もついていないような村だが、酪農と牧畜でそれなりの規模の村人を養っていているようだ。

しかしオークの襲撃に悩まされ、最近では半年ごとに襲われるありさまらしい。その度に少なくない女性が殺われており、もはやこの土地を捨てるしかないというところまで追い詰められているようだ。

幾人かの村人から期待のまなざしで見られたが、残念ながら私にオークの集団を殲滅するほどの戦闘力はない。とりあえず報告を王都にあげ彼らの去就を担保してもらうよう要請することだけは約束したが、うしろめたさは残る。

朝出立するとき、この村のチーズと牛乳をいただいた。素朴な味ではあるが濃厚なうまみがあった。

村を捨てるとなると、家畜は連れてはいけまい。

あまったチーズは丁寧に包み、大切に鞆にしまいこんで村を後にする。

三日目：

険しい崖を越え、村人が痘痕山と呼ぶモルドラ山中腹にたどり着いた。

そこから見下ろして私は驚愕した。あれは要塞ではないか？

双眼鏡で覗くと、間違いなくオークたちが生活している砦だ。だが事前に想像していたものとはまったく様相が違う。

オークたちは非常に原始的な生活をしている、というのが一般的通念であり、私自身丸太や草木を組み合わせた簡素な砦を想像していた。しかし今私の眼下に見える要塞は、泥と砂利を混ぜたコンクリートで補強され極めて戦術的に理にかなった造りをもった先進的なそれであった。

あきらかに弓矢への防護、騎馬隊の突撃を防ぐ城壁などを兼ね備えており、一朝一夕で作られた代物ではないことは間違いなかった。

オークたちがこれほどのものを築いたのか？

だとすれば我々の認識は大きく間違っていたこととなる。

彼らは辺境の蛮族などといったものではなく、人族と
国境を接する軍事国家だ。

これまでの常識を覆す光景に寒気を感じながらも、
研究者としての一面は興奮を隠しえない。

考えてみれば、これまで人間が見てきたオークは本国から
流れ着いたはぐれ者の集団だ。彼らがまともな装備を
もっていないというのは自明の理であり、それを基準に彼等を
判断するのがそもそも誤りだったのだろう。

研究者としては探究心が沸き上がるが、偵察者としては
警鐘が鳴る。これは私一人でどうこうできる代物ではない。
王都に引き返し、軍を動かすべき事案だ。

とはいえ、私の口頭報告だけでは信憑性に欠けるだろう。
流石にこれ以上近づくのは難しいので、詳細なスケッチをとり
それを報告書とする。

一日で描けるような全貌でもないため、三日はここに
陣取ることとする。周囲は岩場で見通しが効かないのが
不安材料だが、“陰者の外套”だけでなく獣の接近を察知する
魔道具なども揃えてはある。備えあれば憂いなし、だ。



六日目：

最悪の日になった。

岩場に欺瞞を施し睡眠を取っていた私をオークたちが取り囲んでいた。

その時警報魔道具が機能しなかったことをもって考えればよかったのだが、寝起きに想定外の事態に陥った私にはその余裕はなかった。

すぐに手元に用意していた煙幕弾を破裂させ、“飛竜の旋風”で飛翔し逃げようとしたのだが数m飛び上がったところで“飛竜の旋風”は効力を失った。

あとで聞かされたことだが、オークは我々人族のもつ魔道具を警戒しており多数のサンプルを取得、それらを無効化する魔道具——というものを開発していたらしい。

そんなことをつゆとも知らずただの布切れと化したそれをはためかせながら、私は空中からまっさかさまに落下し意識を失った。

意識を取り戻したときには、全てが終わっていた。
両手を拘束され、足には鉄球をつけられていた私の体は
オークたちによって徹底的に陵辱されたらしい。
二百年以上守っていた純潔が散る瞬間すら、
私は知らずに終わった。

全身にねばつく汚物とそこから漂う異臭、股間と尻から伝わる
熱い痛みと羞恥に泣きそうになる。
ただ、私の醜態を見て下衆に笑うオークたちを見て
涙だけはなんとかこらえることができた。

全身の倦怠感と激痛に苦しむ私をオークたちは下山させる。
むろん、オーク領側にだ。
道中、何度か催したオークに押し倒された。私はその時はじめて
性行為とはこういうものなのか、と知ることとなった。

砦にたどり着くと、その威容に一瞬だけ屈辱を忘れ呆けた。
砦は我々人族が作るものとも遜色ないものだった。
全てが合理的に作られ、外敵を防ぐための工夫が
無数に施されていることが一目でわかった。

軽く見ていた。

その事実が、私の顔を青ざめさせる。
私だけではなく、人族そのものがオークの逆襲にあったとき
同じような目にあうのではないか……？

七日目：

昨日は書き損ねたが、私は砦の牢獄に入れられた。牢屋そのものは狭いが牢獄全体は広く収容人数は相当なものはずだが、この住人は私の他十数人程度。おそらくはオークの違反者を収容するものではなく、人族から浚ったものを入れるのが目的なのだろう……。

私の荷物は全てとりあげられ、一つ一つ尋問されることとなった。驚くことに尋問官とおぼしきオークは、たどたどしいながら人語を解していた。彼らは、我々を深く研究している。ひょっとしてはぐれ者のオークは、実際は斥候だったのでは？

もちろん、私は彼らの質問に無視をきめこもんだ。だがその度に私はひどく鞭打たれ、あまつさえ筆舌に尽くしがたい性的な責め苦を施された。一応黙秘は通せたが、どちらかというと彼らに聞き出す気があまりなかっただけな気もする。

尋問室から出る際、一つだけ彼らに要求した。尋問官たちはやや協議をしたようだが、結局は私の望みどおりペンと手帳を返してくれた。

ここまでは一昨日の話だ。オークに捕まり尋問されたのは五日目で、その後私が熱を出したため二日間は寝させてもらった。……体は回復したが、心は到底治りそうにない。できれば仮病をつかってこのまま寝込みたいが——

八日目：

わかってはいたが、このまま寝かせてくれるほど優しくはないらしい。
牢屋に尋問官がやってきて、これからの私の処遇を話していった。
……内容は想像どおり、いやそれ以上に最悪なものだった。

- ・私は彼らの“繁殖家畜”という立場にあるらしい。
文字通り、彼らの子を産むのがこれからの私の仕事らしい。
それだけでなく、このオーク砦のオークたちを慰安することも
とても重大で重要な仕事だそうだ。責任感のあまり
涙がとまらない。
- ・恥知らずにも男を知らなかった（過去形だ、ちくしょう）
私は満足に雄たちへご奉仕できないため、これから少しずつ
私の身体に家畜のなんたるかを教えてくださるといふ。
ありがたすぎて歯軋りがとまらない。

……一つ一つ話を聞いたたびに目の前が暗くなっていくのが
わかったが、早速はじまった“奉仕活動”の激しさに
気絶することすら敵わなかった。

女性器と男性器を交接させるだけでなく、尻穴を性行為に用いる方法がある、ということは知識としては知っていた。だが、自分でやるハメになるとは思わなかった。こんなに苦しい思いをして、何が楽しいというのだろうか？

先日犯された時は意識する余裕もなかったが、オークたちの男性器は実におぞましい。恥ずかしながら医療の真似事をする際、人間の男性器を眼にしたことがある。それとはまったく異なる、交尾をする為というよりは暴力的としか言いようがない存在感だ。

研究者としてはあるまじきことながら、詳細については述べたくない。

九日目：

この手帳とペンを要求した理由だが、
オークたちの生態を記すためだ。
彼らの内側でその様子をつぶさに観察する———などという
経験はほかでできるものではない。今の私にできることは、
この研究内容を一つでも多く書き残し、万が一にでも
人間のもとに届くことを願うだけだ———というのは、
表面的な理由。

本音は、正気を保つためだ。
こんな地獄で、研究の真似事をすることで自我を保つ。
それぐらいしか私にはできない

今日は朝早くに牢獄から連れ出され、オークたちが
集合している広場に引きたてられた。
裸に首輪と手枷足枷、という無様な姿の私を
壇上にたたせ、統率者らしきオークがなにやら演説している。
ときどき私のほうを手振り身振りで示し、その度に
下卑た笑いが湧き上がるところを見るとおそらく私を
揶揄しているのだろう。屈辱と羞恥に顔が紅潮するのが
自分でもわかった。涙がにじむ。

オーク語はわからないが、どうやらオークたちは
グループわけされ毎日ローテーションで私を“使う”ことが
決まったようだ。

早速最初のグループが私を取り囲み、犯した。

一つのグループは大体30～40前後の集団のようだ。
彼らは一人一回、などということはなく十分に満足するまで
何度でも繰り返して性行為にいそしんだ。



ハイ...

ブル...

ブル...

デハ、
最初ノグループニ
奉仕ヲ始メタマエ

ガクガク

十日目：

まだ薄暗い夜明けごろ、次のグループが私の牢屋に入ってきた。狭くじめつとした牢屋はオークたちの体臭と、かなしいことに私自身の体臭でむわつとした臭気をたちこめさせている。

オークの一人が鼻をつまんで私のほうを指差し、嗤う。悔しいのは、おそらくほんとうにオークより私のほうが臭いだろう、ということだ。

今日は、私の“日課”を教えられた。

なにやらよくわからない言葉をオークに向かって宣誓させられ、そのあとオークの身体を丹念に舌で舐めとらされる。彼らの汚れを舐めて綺麗にさせられるのだ。吐きそうだ。

数十人分の“沐浴”が終わるころには、もう日が高く昇っていた。

もちろんそれで終わりなのではなく、そこから私の“仕事”が始まるのだが……。

(編集者注：以後数日分を中略。全文は連邦図書館にて公開中)

十九日目：

オークたちに捕まって二週間がたった。

今日までの“調教”で随分と雌臭くなってしまった身体をもてあまし、嘆息しているとオークたちの動きがあわただしい。すわ救援がきたのか、とありえない希望を抱くが入ってきたオークの顔を見てもっと悪い事態に向かっているのだと直感する。

オークたちは村への女狩りをしにいく仕度をしていた。さまざまな武具や道具を用意し、出陣の準備を整える。その“道具”の中に私も含まれていた。

私は丸太を組んだ粗末で無骨な櫓に拘束された。ただ縛り付けられたのではない。

私の豊満な(少し前までは、ちょっとした優越感をもっていたのだが)胸を強調するように荒縄できつく縛り上げ、大股を開かされるよう吊り上げられる。口は拘束具でうめくことしかできず、みつともなく涎が垂れおちる。最後におマンコとケツマンコ(編集者注：十三日ごろの手記にて自分の女性器と尻穴をこう表記するようオークに指導されたことが記述されている)に野太い張り型をねじこめば、淫靡な旗印の完成だ

……このまま、私が出立した村に向かうと聞いたときは
久々に暴れたものだ。しかしオークの膂力で縛られては
敵うはずもなく、かえってケツや胸がふるんふるんと震えて
オークを嘲笑させる結果に終わってしまった。

……周囲を見ると、同じような姿の女性が何人かいた。
私の前に浚われたあの村の女性や、雇われた傭兵なのだろう。

村にたどり着くまで、この軍勢では二日というところか。
私たちは寒空に素肌をさらし、行軍にあわせて肉を揺らして、
オークたちが催せばこのまま犯された。

二十一日目：

村に到着した。

今まではオークは知性がない様を装いわざと村人を逃がしていたようだが、今回は徹底的に村を包囲し、一人も逃がさぬよう陣を敷いた。オークに囲まれ震える彼らの目に飛び込んできたのは、無様でみっともない姿で磔られ、わざとあちこちの肉が震えるように揺らされながら近づく私の磔姿だ。

わずかな時間とはいえ、見知った顔の人々の視線が私に突き刺さるのは、とてもつらい。突き出された股間は大きく広げられ、張り型の隙間から垂れ流れる白濁液は私がどんな目にあっただか彼らに雄弁に語ったことだろう。乳房からぶら下がる金管は人としての尊厳など何一つ認められていない証でもある。

オークたちは私たちを磔から降ろすと、村中を練り歩かさせた。その際、わざわざ保管していたのか私の服に着替えさせてだ。あえてここを出立した際の格好をさせることで、村人達はかえって彼らにはむかったものがどうなるかをいやでも記憶させられたことだろう。おそらく、村人たちもそうなるのだとその場にいる全ての人間が思ったことだろう。

ところが、オークたちはもつと狡猾だった。
統率者らしきオークはなかなか流暢な人語で
この村をオーク領とすることを宣言し、村の女性の
三割と、これまで王都に収めていた税と同額を
オークに納めればこれまで通りの生活を保障すると伝えた。

困惑する村人に三日の猶予を与えると告げたあと、
オークたちは村の中央に陣取り酒盛りを始めた。
酒のつまみは私たちだ。

三日三晩村にあわれな雌の嬌声が響き渡った後、
村長たちは女性と農作物を差し出した。
オークは村にいくばくかの兵を残し、皆へと女たちを連れ帰った。
道中、オークはあえて新しい獲物には手を出さず、
拘束した私たちを存分に犯した。
その横を歩かされた女性たちは自分の行く末を
いやというほど脳裏に焼き付けられただろう。

(編集者注：この後二十七日の分まで手記が飛ぶ。
手記の内容から十九・二十一日の記述は
実際には砦に帰った二十六日ごろに書かれたものと推測される)



くっ...
くっ...

プル...

いっせー...

プル...

見な...
いで...

ま...ま、
まるみえ...

あ...あ

ガッ
ガッ

ズ
ズ
ズ
ズ

ポ
ロ
ン

あうう...

ガ
チ
カ
ッ

カ
ン
...

フ
ク
...

え...
...

!!
...

!!
...

ま
ま
...



スッスッスッ
スッスッスッ
スッスッスッ
スッスッスッ

スッスッ
スッスッ
スッスッ

アアアア
アアアア
アアアア
ガッガッ

おび
おび
おび

おび
おび
おび

ビッ♡
♡

あんなに
たがっ...
す...
あ...

い...
い...
い...

い...
い...
い...



グッ

グッポ!!

グッポ!!

あがあがあが

グッポ

あ♡

んが♡

あ♡

ズキョッ♡

ズキョッ♡

ズキョッ♡

ズキョッ♡

あんな大いのも...
飲み込んで...

見たくない...
見たくない...

あんなあんな...
あんなあんな...
あんなあんな...

グッポポ...

うひゃー...

んほお...

んひゃー...

グチャ...

プ...

グ...

プ...

あひゃ...

あひゃ...

ブ...

下品な
声なんだ
...なんて

まだ...

ん...ん...
うひゃ...

二十七日目：

私たちは久しぶりに手足を自由にされ、新しい女性たちと共に広場に集められた。すでに嫌な予感しかしなかったのだが、オークたちが持ち出した道具を見て顔が真っ青になるのを感じた（何度目になるかわからないが）。

彼らは家畜につかうような焼き鑊を持ち出し、我々をナンバリングして管理するようだ。言葉のあやや訳し間違いでではなく、我々は家畜なのだ。

流石に新旧問わず女性たちは逃げようとしたが、逃げられるはずもなく。暴れて泣き叫ぶ女性の声とオークの笑い声、肉の焼ける音で広場は随分と騒然としたものだ。

かくいう私も、できるだけ超然した態度を貫こうとしたが焼き鑊が肌に着いた瞬間は恥も外聞もなく泣き叫んでしまった。私は悪くない。

二十八日目：

まだ尻がひりひりと痛む。この傷は死ぬまで癒えることはないのだろう……。

今日に入ったばかりの新人も交えて一列に並ばされ、口淫を強要させられた。

自分の口内を汚ない肉棒がこすりあげていくのを感じつつ、並んだ女性の顔を見る。

オークのチンポで不恰好に歪んだ頬や鼻の下は、目をそむけたくなるほど滑稽だった。

きっと私も、滑稽な面を晒していたのだろう。

(編集者注：中略)

三十九日目：

明らかにおかしいことに気づく。先週に比べ間違いなく腹が大きくなっている。

もはや己の懐妊を認めるしかないが、おそらく捕まって数日以内に受精したであろうことを鑑みてもこの短期間で目に見えてわかるほどの大きさになるはずがない。

が、その疑問はオークがあっさりと教えてくれた。

オークの子供は種族問わず、大体妊娠から三ヶ月ほどで生まれるそうだ。人間が十月ほどなことを考えると三倍以上の速度ということになる。

……一年に三回は、出産させる腹づもりらしい。

それを聞いた女性の中には気を失った者もいた。私も泣きたい。

牢屋の前に、鏡が置かれた。そこに写ったポテ腹の自分を見ると、腹の奥まで遺伝子まで汚された自分の姿がみじめに見える。

（編集者注：以後約三週間分記述なし）

六十二日目：

しばらくは手記を書くこともできなかった。
急速に成長する“我が子”に体力を奪われているうえ、
オークたちの陵辱がいつそう激しくなったのだ。

子供を孕んだのだから、てっきり少しは休ませてもらえるのかと
思ったのだが。あまりの扱いに抗議したのだが、
どうやらオークたちは“母親の胎内にいるときに母体が
陵辱されればされるほど、子供は強くなる”
——という珍妙な信仰があるらしい。

あまりにひどい迷信だが、研究者としては久々にオークの生態を
垣間見えて少しだけ気分がもちなおす。

……こんなことくらいしか、楽しみはないのだ。

私の腹に巣食っている寄生虫は、宿主の栄養を
貪り食ってすくすくと育っているようだ。

よく、もぞもぞと動いている。おぞましい。

(編集者注：中略)

九十日目：

私は母になった。

めでたいな。とてもめでたい。

(編集者注：この後のページは書きなぐられていたが、
判読不能)

九十一日目：

出産から一日しか経っていないのだが、もう通常のお仕事が始まった。

出産経験は初めてとはいえ、そんな体力があるはずもないと思うのだが驚くことにもう身体は回復しいつもどおりヨガってしまう。

どうやらオークたちから毎日与えられる犬のイサもどきは疲労回復を飛び越え、肉体再生に近い効能を持っているらしい。

もはや魔道具に近い代物で、どうやってこれを作っているのかわからないがあるいはオークの強靱な肉体の秘密があるのかもしれない。

ちなみに。

私たちの食事は後ろから犯されながら犬食いするか、犯されながら口移して食べさせられるかだ。

私は眩みの森で取れるキノコを使ったシチューが好きだった。



グー...

ギョ...

びび...

ブチャ...

うぶ...

ゴッ
ゴッ

...

ポ
チャ...

ム
チャ...

(編集者注：中略)

百五十八日目：

久しぶりに砦の外に出された。

と、言っても人間の村ではなく、オークの本国に連れて行かれたのだが。

彼らの町並みを見れると思えば多少は興味があったのだが生憎目隠しをされてしまった。

オークたちの嘲笑だけが私が得た情報であり、晒し者にされている実感しかなかった。

百五十九日目：

どうやら私はオークの集会に連れ出されたいらしい。
人間族とは様相が違うが、夜会の類だろうということは
想像に難くなかった。

普段は裸かボロ布のような出で立ちをさせられているのに、
今日は扇情的ながら一応は服と呼べるものを
身に着けた。だがその格好はかえって脱ぎ捨てたくなるほど
恥知らずなものだったか……

私はその格好でたくさんのオークの接待をさせられた。
むろん、私たちがする接待などやることはひとつなのだが。

(編集者注：中略)

二百五十八日目：

手帳が書き込める場所がなくなった。

ダメもとでオークたちに新しいノートとペンを要求したのだが、驚くことにあっさりと渡してくれた。

正直、ケツ穴をなめるぐらいのことはやるつもりだったのだが。

どうやら、オークたちも私が手記を書いていることで精神を保っていることに気づいているようだ。

既に狂ってしまった女性もいる中で、紙とペンだけ与えておけば“健康的”ているのであれば、惜しむ理由もないのだろう。

与えられた紙とペンは人間が使うものと遜色なかった。ここでも彼らの技術力の高さが伺える。

(編集者注：以後の手記は現在編纂中であり、
この本ではいくつかを抜粋するに留める)

家畜生活七年と三ヶ月十六日目：

今日は壁に押し込められて犯された。
なんでも、オーク本国ではこういうやり方が
流行りになったらしい。

最初はいつもヤッてることと何が違うのか……と思ったが、
動けない不安感と見えない相手に犯されると言う
屈辱感が、いつもとは違う快感をもたらした。

喘ぎ声を我慢しなくなって久しいが、
今日はとみに大きく激しい声だったらしい。
最近入った女性たちの見る目つきが
汚物を見る目だったのが、くやしい。

私だって好きでこうなったわけじゃない。

家畜生活二十四年と一ヶ月十八日目：

私ももうこの古株だ。私を捕まえたときのオークはもう半分くらいしか残っていないし、孕み腹を抱えるのも百回近くになる。

改めて眺めてみると、私の身体も相当だらしなくなったものだ。カモシカのようにすらりと伸びた脚や腕は、贅肉でだぶだぶになりピアスが垂れ下がる乳房は醜く膨れ上がっている。下腹もぽっこりと膨れて垂れ、ケツもずっしりと重くなった。

まさに雄に犯され子を孕むことに特化した身体だ。どうせなら、精神の方も特化してしまえば楽になるのに。

家畜生活百五十八年と六ヶ月二日：

いまさらながら、気づいたことがある。

私たち月妖族は、潤沢な魔力さえあれば
いつまでも若い身体を維持できる。

しかし年々必要な魔力は膨れ上がるため、
大抵の月妖族は二百年ほどで老化をはじめて死に至る。
かつては私も魔力を確保する手段に苦勞したものだ。

ところが、この健康的とはとても言えない牢獄生活に
かかわらず、私は若い身体のまま生きている。

どうやら、オークの精液などには膨大な魔力が
含まれているらしいのだ。

まっとうな研究施設さえあれば、オークを基にした
様々な魔薬がつかれることだろう。
研究しただけでは、色々な病を治せる
万病薬になるかもしれない。

無限の可能性を秘めた話だが、
私には絶望の種でしかない。

ここでオークに犯されている限り、
私は死んで解放されることすらないということだ。

最近はこの手記も犯されながら書いている。
今私を犯しているオークたちは、多分私の息子であり孫であり、
曾孫だろう。

どうも私の手記はオークたちにとってもおもしろい読み物らしい。
これまで書き溜めた手記は全てこの牢獄内に
保管されているようだ。

そろそろ、書くのをやめようかとも考えている。
だが、怖くてやめられない自分もいる。

このオーク砦は、そろそろ放棄されるらしい。
理由はわからないが、特にあわただしくもないところを見ると
人間に攻められているというわけでもないようだ。

私も新しいオーク砦に移されるだろう。
そこでまた新たな手記を書く。

だが今は、この手記をもってこのオーク砦での記述を
終えようと思う。

願わくば、この手記が未来永劫誰の目にも
触れないことを切に祈る。

“家畜の賢者”ラヴィニア・メイザースがここに記す。

後記：

今回の発掘により謎に包まれた賢者ラヴィニアの晩年が明らかになりつつある。遺跡そのものの調査とあわせ、その記述からは当時の様子がまざまざと蘇るかのようだ。

本書では記載しきれなかった手記はその複製が全て連邦図書館にて公開されており、誰でも閲覧可能である。

当学会ではこの膨大な資料の解析のため、随時人員を募集している。本書を手にとった方は是非図書館に脚を運び、原文を見ていただきたい。

編集・発行：賢人調査学会